リーザ・フリッチュの手記（1）

渡辺　　肇
倉敷芸術科学大学院人間文化研究科

（2010年10月1日　受理）

リーザ・フリッチュは1920年6月3日漢口に生まれ、1949年2月4日に上海を去るまでを支那で過ごしたドイツ女性である。90歳を超えた現在も健在である。彼女は84歳になった時、人生の回想記を著した。彼女の手記は非常に興味深いものである。なかんずく、日本人にとって1920年から1949年の支那の歴史は日本の歴史と非常に関連がある。その間、日本は、1928年には蔣介石の北伐に干渉して山東出兵を行い、1931年には満洲事変を起こす。更に1937年には盧溝橋事件が発生し、それは北支那事変から全面戦争たる支那事変に発展する。これら侵略行為は1945年の敗戦により終了する。他方支那では蔣介石の國民党と毛澤東の共産党の國共内戦が開始される。1949年10月1日には共産党が勝利し中華人民共和國が成立する。リーザはこの激動の時代を支那でドイツ人として過ごしたのである。日本人にとっても歴史を振り返る貴重な資料となろう。

図1．リーザが21歳ごろの写真

私の人生を語るためには少しだけ話を広げなければなりません。

私の父ヘルマン・アルベルト・アードルフ・ゾッベは1885年5月4日にハルバーシュタットで生まれました。1909年には若くしてハンブルクのカルロヴィッツ商会から支那の漢口[1]に送られました。本来、父は南米に行きたかったのですが、祖父が許しませんでした。南米は「危険」であったからです。1911年には父は漢口で1911年10月10日の大清帝国から中華民國への革命[2]を体験します。

いつの事か父は私の母、1895年5月29日生れのヘートヴィッヒ・エマ・ヘンリエッテ・シュラウベと書面で婚約します。父は母が小さな少女の時から知り合いで、既にその頃から父は母と結婚したいと思っていました。両親は遠縁の関係で共通の曾祖父エリアス・シュラウベを有していました。

私の祖父母はアルベルト・シュラウベとマルガレッテ・シュラウベで、父は祖父母の目にはかないませんでした。父が学校出ではなかったからです。

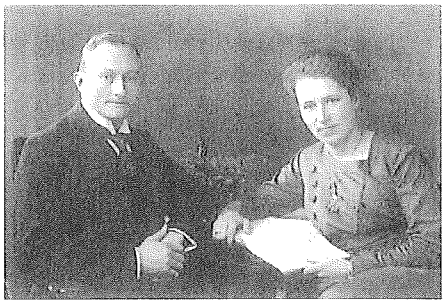

図2. リーザの両親

1914年から1915年にかけての戦争[3]が始まった最初の月々に父はある下宿屋で1人の英国青年と一緒に暮らしていました。他のドイツ人達はそれを知って不審に思っていたとの事です。

しかし1915年になると父はドイツに帰国しようとしました。父は大荷物を青島[4]に送りました。荷物はそこから船のアイテル・フリードリッヒ号[5]でドイツに送られる筈でした。荷物はドイツには届かなかったのです。

図3. 上の船がアイテル・フリードリッヒ号

荷物の中には母の婚礼装束用の絹も入っていたのです。

父は揚子江を上海に向かいました。そこで日本の汽船[6]でサンフランシスコ[7]に向かい乗船したのです。この蒸気船上にはラウテルバッハ海軍大佐も乗船していました。大佐は巡洋艦エムデン号[8]が拿捕した商船を回航する役目でしたが、エムデン号に乗艦させられる事は無かったのです。エムデン号は既に敵艦によって撃滅されていたからです。大佐がどのようにして上海に来たのか私は知りません。

父と大佐がサンフランシスコに到着した際に、父は大佐を船室の洋服ダンスの中に閉じ込めて、その荷物だけを甲板に運びました。大佐を知っていて、待っていた新聞記者たちに父は言いました。大佐はすでに下船してしまっていると。記者たち全員が消えてしまった後に父は大佐を出しました。2人は最高級のホテルに泊まりました。2人はしだいに惨めなホテルに住む事になるのです。2人が金儲けをしなければならぬと気づくまでです。2人は別々にニューヨークに行く事に決めました。父はアメリカ兵に変装してニューヨークに行くのです。

父は英語をイギリス訛りでもアメリカ訛りででも話す事が出来ました。

ニューヨークでは父は叔父さん（父の母の弟）のところに住みました。叔父は家族の嫌われ者としてアメリカに移住していたのです。この叔父が父にハーバート・スミスと言う名前の偽造書類を用意してくれました。父が自分の本名と同じである、このイニシアルH・Sを持ったのは非常に重要でした。と言うのは、もし誰かに検査される場合、洗濯物（例えばハンカチ）にイニシアルが全くないとすると、奇異な感じをあたえてしまうからです。

父は今や英国人ハーバート・スミスとしてオランダ[9]汽船の石炭人夫としてヨーテボリ[10]

に向かいます。そこから連絡船（フェリー）でシュテッティーン[11]に向かいます。シュテッティーンで父はスパイとして逮捕されます。その訳は父が身分証明書を有していなかったからです。（多分父はそれを破棄してしまっていたのでしょうか？）

父は祖父に連絡して貰う様に頼みます。祖父が父の身元確認を出来る様にです。祖父は身元確認に来てくれました。

私の両親がいつ再会したのかは、私は残念ながらしりません。いずれにしろ父は戦時中ずっと西部戦線[12]に従軍しています。父はそこで何度も負傷します。

私の母、ヘートヴィッヒ・シュラウベは、婚約者が前線に従軍している間に無為に過ごしたくありませんでした。母はベルリンの聖エリーザベト病院で看護婦としての教育を受けます。ヨハネ騎士団看護婦として西部戦線カリニナンクの野戦病院に送られます。

図4. リーザの母

幸運な事に父と母は無事に戦争から帰還します、そして、1919年2月1日にハルツ地方のアルテンアウで結婚します。そこでは私の祖父が森林監督官でした。この地位によって、そこで射殺された野獣はすべて頭を祖父に与えられる事になっていました。私の祖母はある期間すべての野獣の舌を塩付けにしました。何人かが結婚式へ参列出来る様にです。

それで結婚式の食事は貧弱すぎる事にはならなかったのです。[13]

1919年から1920年にかけては私の両親はハンブルクに居住しました。そこで父は支那語の知識を完璧なものにしたのです。私の母が父を満腹にさせるのはしばしば困難な事でした。母がメインコースを給仕した後に、父はそれが前菜であったのか否かを良く訊いたものだとの事です。ハンブルクで父はヴェストファル商会から漢口に送られる契約をしました。3月か4月に両親は乗船しました。私は母の勇気に感嘆します。と言うのは、母はその頃すでに出産間際だったからです。

1920年4月に両親は上海に到着して、ひそかに下船します。その理由は、両親は日本への入国許可しか有していなかったからです。そこから揚子江を汽船で遡上します。そこから無事に漢口に到着します。父は1人の支那人の友人に預託してあった品々が大切に保管されていたのを目の前に見出します。

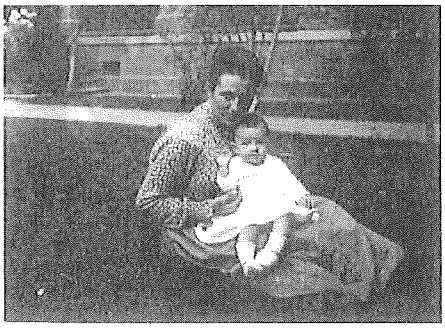

図5. リーザと母親

漢口で私は1920年6月3日の正午12時に礼砲が鳴り響く中に生まれます。しかし礼砲は私の為にではなく、英国王ジョージ5世の

誕生日に向けてのものでした。

英国人の友人たちは、私の名前はジョージ5世に因んで、ジョージナとするべきだという意見でした。

私の初めての夏、私は既に14日かけて揚子江の汽船で九江に向けた私の最初の旅をしました。我々は輿(コシ)に乗って廬山(ロザン)[14]山脈の牯嶺(クーリン)に行きました。ひどい雨でした。私を守るために、母は私を自分のレインコートで包みました。

苦力(クーリー)[15]たちが休憩して停まる度に、父がやって来て「子供はまだ生きているか」と尋ねたそうです。私たちは無事に牯嶺に到着し、ベヒラー家に滞在しました。

ベヒラー夫人は私の母に主として御飯を与えました。支那人は主として御飯を食べているが、母乳は充分に出ているからだとの事でした。

でも母はとても弱っていて母乳は出て来ませんでした。母は母乳が充分だと思っていました。私は5分間の授乳で満足しましたから。だって、それ以上母乳は出て来ませんでしたから。私は殆ど飢餓状態となり、毎週1オンス[16]ずつ痩せてしまいました。他方、ベヒラー夫人の娘さんは他の食物を貰って、毎週体重が増加していましたのに。

英国人医師のマックウィリー先生はその時に私が栄養不良であると診断してくれました。その後、何が起きたのか私は知りません。

妹のエーファが1923年10月23日に、私が生まれたのと同じ漢口の病院で生まれた際に、廬山山脈の廬林(ルーリン)に自分の家を建てる事を決めました。母が設計を致しました。私たちの敷地から掘出された石で建造されました。その家は赤い瓦で葺かれた、鋭い傾斜の屋根を持っていました。

図6. リーザが過ごした廬林の別荘

私たちはこの家で何時も暑い季節を過ごしました。大抵は6月中旬から9月中旬までした。子供たちにとっては楽天地でした。

1923年に父は独立し、ハー・ゾッベ商会を設立しました。父は船舶ブローカーと保険代理店を営みました。仕事が忙しかったので、父は母と2人の娘を船でドイツ・ハルツ地方のアルテンアウにある母の実家へ帰しました。そこで行われた、妹のエーファの洗礼を私は覚えています。私自身は1921年に牯嶺でスポアー牧師によって洗礼を受けました。

父が一緒にドイツに来たのかどうかは、私は知りません。

父の仕事は益々拡張して行きました。1925年に弟のヨッヘンが、私と妹が生まれたのと同じ漢口の病院で生まれました。跡取り息子[17]が出来たのだから、両親の喜びは大きかった事でしょう。

弟が6歳になった時に、我々は復活祭の際に2隻の船を借切って、揚子江を遡上しました。両親と弟のヨッヘンが1隻の船に乗り、妹のエーファと私は阿媽(アマ)[18]と一緒の船に乗

りました。

天候が悪かったので、揚子江上にはかなりの波がありました。妹と私が心配しない様に、父が私たちの船に乗り移って来たのを覚えています。

漢口にはドイツ人学校がありました。私は1926年に入学しました。この学校はドイツ人居留民によって維持されていました。その頃には3人の先生がドイツから来ていました。児童が2人以上いれば、クラスが作られました。私のクラスには5人の児童がいました。一時期には全体で40人の児童がいました。

図7. 阿媽と一緒のリーザ三姉弟

主要教科はドイツから来ていた3人の先生によって教えられましたが、他の附随教科の総ては居留民の男女によって教えられました。その学校の仕組は以下の通りでした。3人の先生がそれぞれ自分の教室を持っていて、児童たちは教科によって常に教室を移動したものです。しばしば、一つの教室で2クラスが同時に授業を受けました。1クラスが前方で授業を受け、他のクラスが後方で書写の課題をするという風にです。私たちはあまり大きな住居には住んでいませんでしたので、母は授業が終わった午後には、私たちを連れて国際競馬倶楽部に行きました。そこでは素晴らしい遊園地があったからです。私たち子供たちは阿媽に世話されて遊んだものです。その間に、母は知合いの女性たちと午後の御茶を楽しんでいたのです。時々は子供たちも、英国風にサンドイッチや、クッキーや、バターとジャムを塗ったトーストが付いた、この午後の御茶に出席させて貰ったものです。日曜日には私たちの生活の大部分をこの倶楽部で過ごしたものです。1927年に私たちが水洗便所付きの住居に引っ越したのは大事件でした。以前の家では木箱の中に陶器の桶が入っていて、一人の女性が毎朝その桶を空にして掃除していました。支那では、以前は（ひょっとすると今でも？）糞尿を集めて肥料として使っていました。それが生野菜を食べる事の出来ない理由でした。トマトや、ブドウや、キュウリなどはアルコールで洗っていました。緑のサラダ菜は、どこで生育し安全であると確認された場合のみ、食べる事が出来ました。水は煮沸されたものだけを飲む事が出来ました。サラダ菜は煮沸水で洗いました。私が覚えている限りは、私たちはいつもバンド[19]の、揚子江岸通りに住んでいました。この通りは漢口の傍にあり、1Kmほどの幅がありました。1940年に両親が移住した唯一の独立家屋だけは郊外にあるジャーディン・エステート[20]に所在しました。それから、1927年には3人になった私たち子供は母と一緒に貨物船でジェノア[21]に向かいました。ジェノアには母方の祖父母が迎えに来ていました。父も遅れて到着しました。と言うのはその間に祖父が転勤になり、今回はハノーバーの近くにあるダイスター河畔のラウエンアウに着任していたからです。多くの土地と厩舎が森林監督官事務所の管轄でした。この地で私は村の学校

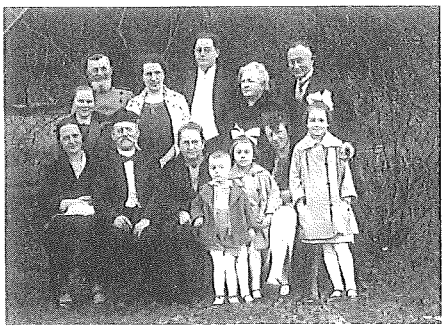
図8. ラウエンアウでのリーザー家

に通わねばなりませんでした。私にとってそれは大転換でした。それまではローマ字で書いていたのに、今やドイツ文字で書かねばならなかったからです。ラウエンアウでの収穫の際には野原に行きました。冬には屠殺を手伝いました。学校に行かなければならないと、私は泣き叫び始めたものです。ソーセージ作りを手伝う方が好きだったからです。パン焼きがまとそれに付属する鍋が付いたおもちゃの電気レンジを貰ったのは大きな出来事でした。私にとって最良の玩具でした。祖母はクリスマスイヴには一緒に料理をしました。この間でしたが、弟が洗礼を受けました。両親はアルテンアウのシュライバー牧師に洗礼を頼みました。シュライバー牧師は母の堅信の儀を行い、両親の婚姻の儀を行い、妹のエーファを洗礼の儀を行った方でした。洗礼の後に弟はシュライバー牧師の許に行き御礼を言いました（弟は3歳にしかなっていませんでした）。老牧師は、長く牧師をやってきたが、洗礼を受けた子供に御礼を言われたのは初めてだと言いました。1928年にはシベリア経由で支那に戻りました。この旅行に付いて私が覚えているのは食堂車が付いていなかった事です。車軸が過熱してしまったからです。この不幸な出来事はそんなに深刻ではありませんでした。各駅で食料を買う事が出来たからです。それで両親は2個のアルミ製ミルク缶を持っていました。固形燃料を持っていたかどうか、私は知りません。

とにかく、朝には最初の駅で一缶のミルクを買い、昼ごろにはボルシチ[22]を買いました。パンも何とか入手できました。その様にして私たちは何とか切抜ける事ができました。

給仕（プロヴォードニック）とは寝台車の車掌の事です。そこで御茶用の湯を貰う事が出来ました。しかし、これは1等車の場合のみです。他の乗客は湯も駅で手に入れたのです。

食事時間には、乗客が何か食べ物を手に入れられる様に、列車はかなり長時間にわたり停車しました。

この他に私が言いたいのはモスクワから露満国境に到るまでに、7日7晩を要したと言う事です。

最短便を用いてもベルリンからワルシャワ、モスクワ、バイカル湖、満洲里[23]、奉天[24]、北京を経て、漢口までには14日掛ったのです。

しかし今回は、私たちは大連を経て船で上海に向かわねばなりませんでした。と言うのは私たちの支那人乳母が大連のドイツ旅館で私たちを待っていたからです。それで両親は夜に友人たちと過ごす事ができたのです。父が、揚子江を遡上して漢口に帰着する前に、色々な仕事の話をする事が出来たのは確かでしょう。

漢口では、冬は寒く、－15℃まで下がります。夏は非常に熱く、日陰でも45℃となり、

湿度も90％以上です。

この暑さが長い夏季休暇を取っていつも廬林へ行ったのかと言う理由です。そこでは10℃以上は涼しかったからです。

この時代に父は主として広いヴェランダで過ごしました。ヴェランダは住居の周りを囲んでいました。一部は居間、他は寝室でした。

使用人として私たちはいつも料理人と阿媽を廬林に連れて行きました。料理人の助手と苦力が父の世話をしていました。

廬林での滞在を楽しんだのみならず、私たちはそこに到る旅をも楽しんだのです。たいてい私たちは汽船でこの旅をしたのですが、汽船はジェティー川の傍の私たちの家の前に停泊したのです。料理人は私の母がたいていは前もって行かせていたのです。家をちゃんと手入れし、換気などさせる為にでした。カイメンディさんが家族ぐるみで常駐していました。カイメンディさんは番人と庭師を兼ねていました。この人は、私たちが滞在すると、苦力として働き、水を運び、食器洗いをし、石油ランプを毎日掃除しました。水道と電気はそこにはまだ来ていなかったのです。

しかしそれでも、私たちには亜鉛板製の浴槽を有する浴室が三つありました。浴室を用いるときには、台所で湯を沸かし、浴室まで運んだのです。排水の為には浴槽を戸外に持ち出す必要があったのです。しかし、頻度は高くありませんでした。私たちは毎日の様に水泳に行っていたからです。それは素晴らしい水泳プールでした。囲まれたプールの一方に小川が注いでいました。その水はそこの排水口から流れ出ていたのです。塩素消毒はされていませんでしたが、常に清潔で新鮮な水が注いでいたのです。

牯嶺への旅に付いてまだ報告する事があります。汽船での航海は素晴らしいものでした。毎日、早朝の紅茶がふるまわれます。紅茶と缶入り練乳です。私は練乳だけを飲みたかったものです。暫くすると色々な物が含まれる英国風の朝食がふるまわれたのです。

この機会に私たち子供は自分たちの望むものを楽しめたのです。日常には、御粥（おかゆ）とパンと温かいミルク、それから、ああ、温かいミルクの表皮しかなかったのです。

廬林では様々な名目で祝宴を持ちました。牯嶺に住んでいる知人たちが立寄って行かない週はほとんどありませんでした。また日帰りの遠足をしばしば行ったものです。

たくさんの果物と野菜とヤンタン（ドイツではキウィと呼ばれますが）が戸口に届けられました。廬山でのみヤンタンは自生するのです。私がヤンタンと再会したのは1971年に米国のスーパーマーケットに於いてです。

家の周りには広大な敷地がありました。大部分は菜園として用いられていました。家の周りだけに芝生を植えてありました。芝生は松の木で囲まれていました。その前には野の花が、例えば、虎百合とか、オダマキとかです。オダマキは母が原野から私たちのところに摘んできました。他のところには素晴らしいダリヤが咲いていました。母はほとんど毎朝の様に腕いっぱいに百合とオダマキを家に持って帰り、それらの花を分けて、家を飾る

様に、殆ど総ての花瓶に活けたのでした。

私たちの遠足の特別な目的地は３本の木が生えている寺でした。それは何か特別なものでした。この３本の木は巨木だったからです。3,000年の樹齢だとの事でした。さもなければ支那人たちは総ての樹木を切り倒してしまっていたからです。すべては藪でしかありませんでした。毎年切り取って、燃料にしたり、木炭にしたからです。

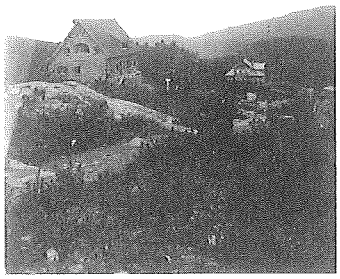
図９．廬林の別荘周辺

果物と野菜を除いた必要品は、歩いて半時間ないしは１時間の牯嶺から買って来なければなりませんでした。たいていは、料理人のシャンか留守番役が買物に行ったのだと、私は思います。

たいていの野菜は、ジャガイモやトウモロコシをも含め、庭にありました。ジャガイモについては、しばしば一袋分を漢口まで持帰ったものです。御祝いの中では８月の御月見が最重要でした。たいていは天気も良く、お客さんたちもナウコン峠まで移動して、鄱陽湖（私の記憶ではブランデンブルク州[25]と同じくらいの大きさでした。）から満月が昇ってくるのを眺めたのです。月光の下で家に帰り祝宴を始めたのです。私たちが給仕としてエプロンを掛け、頭巾を被った姿の写真がまだ存在しています。

夏にはよく泊まりがけの客が来たものでした。ある時はハーケス叔母さんが来ましたし、母の弟のリヒアルト叔父さんは毎年のように来ました。後年になると、妻のアンネマリー叔母さんと一緒にです。

父は週末を過ごしに良く来ました。金曜日の夜に汽船で九江に来て、サンパン[26]に乗換えて、さらにバスで山の麓まで来て、徒歩で私たちのところまで上がってきました。父はいつもジャンゼ（輿（コシ））を注文してはいましたが、空で行かせました。苦力が面目と御金を失わない様にする為にです。私たちはいつも御昼御飯を準備して父を待ったものです。しかし、父が到着しないときに母は御昼御飯を始めれば御父さんは来るわと言ったものでした。たいていの場合はそういう事になりました。そして私たちが既に着席していると、父のフゥ、フゥという声が聞こえたものです。それから父が到着するまでには少しの間がありました。幾つもの曲がり道から家が見えていて、（道路は山にそって婉曲していたのです。）その曲がり角から音もこちらに届い

図 10．廬林の山道

たからです。

私たちが廬林に滞在していた3ヶ月間に、父は一度14日間来た事がありました。1回にそれ以上長い休暇は取れませんでした。良く父は鱒釣りに行きました。しかし、母は一緒に連れて行っては貰えませんでした。というのは、父はたいていの場合、釣果がなかったからです。

家の近くですが、敷地の外側に、小川が流れていました。我が家の土地の水準に母は大きな窪みを掘らせました。その窪みを母は浴槽と名付けました。私たちが泳ぎに行かなかった際に、母はそこで涼みました。岩の下の水の中にビールやその他の飲み物が冷やされました。カイメンディさんもこの場所から水を汲んでいました。

家の敷地の外の茂みに、外からは見えない、大きな平らな石がありました。この岩を私たちは日光浴に使いました。ある時私は日焼けしすぎてしまい、尻に火傷をしてしまいましたので、ベッドにうつ伏せにしか寝られませんでした。

6月に牯嶺と廬林に上ってくるときには水田の若草色は目の保養となりました。9月に帰途に就くときには、水田は既に収穫を終えた後でした。

冬はたいてい1月末か2月初めに来たのですが、非常に寒くなる事がありました。ある年には非常に雪が降りました。私たちが学校で雪ダルマを作ったほどです。

この季節には騎乗しての模擬狐狩りが開催され、両親が参加しました。夏には父はポロに興じましたが、ポロには揚子江艦隊の士官たちも参加しました。ある年には英国王ジョージ6世の一番下の弟であるウィンザー大尉も参加したのです。

図11. ポロに興ずるリーザの父

狩りとポロのシーズンが終わりにジムカーナと言う騎乗競技会がありました。私たちが大きくなった時には、私たちもまたその競技会に参加しました。私たちが廬林に滞在中だった、1931年の夏には揚子江が非常に増水し、堤防が決壊したので、漢口全体が水浸しになりました。1週間にわたり船でしか移動できなかったとの事でした。父は幸運な事にカヌーを持っていました。水位が非常に高かったので、中2階の窓から入ったそうです。私たちは2階に住んでいたので損害はありませんでした。私たちの住居のドアまでには数段の階段が続いていました。この階段はいくぶん開放されていました。それで父がカヌーの中で平らに横たわればドアの下まで入って来て、私たちの住居に通ずる階段に接岸できたとの事です。これは私が聞いた話です。

後背地のジャーディン・エステートに位置していた家屋は、バンドの様に土嚢を積んで保護されなかったので、屋根まで水に浸かったそうです。水がゆっくりと引いて行った時に、競馬場のレース・コースはまだ湖の様な状態でした。通常、走路は泥炭で嵩上げされ

ていて普通の高さになっていたのですが。トレーニング用の走路は掘下げられていて、その中に障害競技用の走路がありました。その中には9ホールのゴルフ場がありました。中央部では、夏にはポロが、冬にはフットボールが行われました。

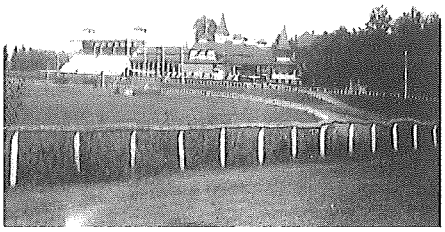

図12. 競馬場

競走路の傍に倶楽部ハウスがあり、そこから競馬を見る事が出来ました。その横に大きなスタンドがあり、支那人たちは競馬開催日には入場していました。支那人の倶楽部メンバーはいませんでした。

スタンドの裏側で、夏には、芝生のテニス場を見る事ができ（私の記憶では36面あった様に思います。）、冬にはホッケイかクリケットを見る事ができました。

倶楽部ハウスには清潔な室内水泳場がありましたが、冬にはダンス場と機能を変えました。敷地の周りに18ホールのゴルフ場がありました。その周りには更に乗馬道がありました。

月曜日は馬の休日でしたので、それ以外の日には、父と母は朝の6時に乗馬をしました。時には馬を競技場に運ばせておいたり、時には厩舎から競馬倶楽部まで騎乗して行ったりしました。その後に、夏には水泳をし、冬には家で入浴をし、その後に快適に朝食を取ったのです。

私たちが同一フロアーに住んでいた時はいつも1～2匹の猫を飼っていました。1匹はいつも私たちと一緒にルーリンに旅し、もう1匹は父の連れとして漢口に留まりました。

1927年私たちは英国租界に住んでいました。その頃、蒋介石派と共産党の抗争がありました。武昌は包囲された都市で、その城門は閉ざされていました。郵便配達夫のみが中に入れました。私たちも一部の出来事を体験しました。私たちはヴェランダに黒白赤の三色旗[27]が掲げました。自動車にもです。その様にして私たちは自由に移動できました。支那人たちは私たちドイツ人に対しては憤激してはいなかったからです。英国人に対してのみは憤激していました。英国海軍は私たちの家の前に土嚢（ドノウ）のバリケードを築いていました。英国人に対して支那人たちは石を投げていましたが、射撃はしませんでした。税関の前ではしばしば処刑が行われました。いつも大きな人の環ができました。その真ん中で犯罪人の首がはねられました。何が生じているのかを詳しく見るには、私たちは離れ過ぎていました。しかし、支那人乳母は私たちがそれを見えない様に遮（サエギ）るときには、私たちは自分たちの前で何が進行しているのか知っていました。

当時の支那兵の装備としていつも青龍刀とこうもり傘がありました。後者はいつも袋（？）に入れて背中に斜めに身につけていました。背嚢は持っていなくて、毛布を丸めて肩の上に巻き付けていました。足元は草履か布靴でした。背嚢（ハイノウ）は要らなかったのです。彼

らの物は強要された苦力たちによってかつがれていたからです。我々の家の前のバンドに休憩している、非常に様々な部隊を観察する事ができました。

1927年と1937年の間に私たちは電話を手に入れました。上海までの直通電話を含めてです。その料金は安くはありませんでしたが、父は直ちに返事していました。電話での連絡はそれでも電報に比べて早かったからです。この間に空路も開設されました。アメリカ人が東西空路を、オイラジアと言うドイツの会社が南北空路を開設したのです。ドイツの会社はユンカース社製のJu52型機を飛ばせていました。

私は思い出すのですが、父が翌日上海に飛行するというのです。母は父の為にトランクに必要品を詰めなければなりませんでした。父は背広の下にジョドポーアという乗馬ズボンをはいていました。（ジョドポーアは長靴をはかなくても、はけるインドから来たズボンで、多くの男性にはかれていました。）重量を節約する為にです。上海に向かって父はダグラス社製の飛行機で行きました。重慶に行く時は小型の水上飛行機でした。1931年に私はこの様な小型水上機で初めて飛行しました。そもそも、父は25回飛んだので、上海への無料飛行に招待されたのです。父はその代りに自分の子供たちと一緒に漢口上空の遊覧飛行をする様に頼んだのです。その日が待ちどうしかったのです。私たちは水上機が離着水するジェッティ川にいました。乗客が降りた後に私たちはよじ登って中に入りました。パイロットは大きな環を描いて飛び、それから、武昌湖に飛びました。飛行機会社が揚子江上で2機の水上機を壊してしまってからは、いつも武昌湖に水上機が着水するのです。嵐が来ると揚子江上の波は非常に高くなるので、もはや飛行機は港で危険を冒さないのでした。

父は水上機の繋留場所までタクシーを注文しました。渡し舟の所にまで行ったのです。その渡し舟で川を横切って家に戻ったのです。私たちがまた飛行機に乗れるのは1937年まで待たねばなりませんでした。

1931年の大洪水については既に御報告しました。両親は夏休みの後に私たちが多分汚染されていたでしょう漢口に戻るのを望みませんでした。代わりにドイツに旅行させることにしました。この機会に妹のエーファと私はドイツの寄宿学校に送られることになりました。両親は色々な案内書を取寄せて熱心に検討しました。その際には、私たちの意見はあまり聞かれませんでした。私たちは寄宿学校がどういったものかは何も知りませんでしたので、私たちにはまったく関心を呼ばなかったからかも知れません。私たちはこのたびには長く廬林に留まりました。収穫後にジャガイモの葉を焼く行事を楽しんだり、庭で人参やジャガイモを三つの石で焼いたりして楽しんだものです。最後に母は私たちを、年中牯嶺に住んでいた、リッポルテ家に預けて、自分は荷造りするために漢口に戻りました。リッポルトさんはドイツ人所有のほとんど全部の夏の別荘を管理していました。ついに、母が（父も？）私たちを迎えに来る日が来たのです。汽船で上海まで行きました。両親が夜には外出できるように、阿媽もまた私たちに付添っていったのは確かです。父はドイツ

人パン業者のキースリング＆バーダー社に頼んで黒パンを焼かせました。シベリア鉄道で私たちが食べられる様にです。（以下次号に掲載）

(註)

1 漢口は武昌、漢陽と共に武漢三鎮をなしたが、現在はこの三市が合併し武漢と称する。
2 辛亥革命
3 第1次世界大戦
4 当時はドイツの租借地。1914年11月には神尾光臣中将指揮の日本軍が占領しているので、青島に荷物を送ったのはそれ以前であろう。
5 第3代ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世の次男の名を付けた汽船。
6 日本は既にドイツに対し宣戦布告していたのだから、日本船ではなかったろう。
7 アメリカは未だ参戦していなくてドイツ人は敵国人ではなかった。
8 ドイツ海軍の巡洋艦で第1次世界大戦勃発時に主としてインド洋でゲリラ戦を展開し、多数の敵国商船を沈めたり、拿捕したりした。英国海軍によりインド洋で撃滅される。
9 第1次大戦ではずっと中立国。
10 スエーデン南部の港町。スエーデンも中立国。
11 ドイツ北東部のバルト海に面した港町。現在はポーランド領。
12 ドイツは第1次世界大戦では、西部戦線では仏・英と東部戦線では露と戦った。
13 第1次大戦に敗北したドイツでは皆が飢えている状況であったから、この結婚式の祝宴は、それに比べれば、幾分かはましであったのだろう。
14 支那江西省九江南部にある名峰。一帯は日本の軽井沢の様な保養地として有名。
15 支那人の肉体労働者。
16 28.35グラム。
17 当時の日本と同様にドイツ人も男子重視していた事が分かる。
18 支那人乳母
19 海岸通り、揚子江岸通り、上海のバンド（外灘）が有名。
20 アヘンで財を成し 支那に根を張った英国ユダヤ資本ジャーディン・マセソン社が開発した集合住宅地
21 地中海に面したイタリアの港町。
22 ロシアの代表的スープ。
23 露満国境の満州側の駅がある。
24 満洲に所在する都市、現在は瀋陽と呼ばれている。
25 首都ベルリンを取囲む、当時はプロイセン邦の1州、現在はドイツの1邦。
26 三板と書く。支那で使用された木造小型の平底船。
27 当時のドイツ・ヴァイマール共和国の商業旗、国旗は黒赤金の3色旗。

Die Geschichte von Lisa Fritsch(1)

Hajimu WATANABE
Graduate School of Science and the Humanities
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura,Tsurajima-cho,Kurashiki-shi,712-8505,Okayama,Japan
(Received October 1,2010)

Lisa Fritsch ist Deutsche und lebt heute 90 jährig in Ludwigshafen. Sie wurde am 3.Juni 1920 in Hankow, China, geboren und hat bis zum 4.Februar 1949 in China gelebt. Zwischendurch verbrachte sie auch einige Zeit in Deutschland .

Jener Zeitraum ist für Japaner auch von grossem Interesse, da viele geschichtlich bedeutende Ereignisse stattfanden. 1928, die Absendung der Truppen ins Schandon; 1931－1932, die Besetzung von Mandschu; 1937－1945, die Invasion in den Hauptteil Chinas.

Lisa Fritsch hat in China und Deutschland als Deutsche damals vieles erlebt und beschrieben, was Japanern nicht bekannt ist. Ich denke, daß die Übersetzung dieses Lebensabschnittes ihrer Geschichte auch interessante Hinweise auf unsere japanische Zeitgeschichte wiedergibt.